

【書評】

今知りたいケベック：『ケベックを知るための 54 章』

小畑精和・竹中豊編著、明石書店、2009 年

54 chapitres pour connaître le Québec, sous la direction d'OBATA
Yoshikazu et de TAKENAKA Yutaka, Akashi-shoten, 2009

小松 祐子

KOMATSU Sachiko

近年日本でもケベックへの関心が高まっているように思われる。ケベック州政府をはじめ関係者の地道な活動が実を結んでいることは確かだろう。筆者自身、5 年前にケベック州政府の主催するフランス語教員を対象としたモントリオールでの夏期研修に参加し、すっかりケベック鼠耳となった口である。しかしそのようなマイクロな話を超えて、もっと大きな流れとして、世界のグローバル化の進展とともに、ケベックが注目されるべき状況が整っているのではないかと思うのである。

筆者の専門とするフランス語教育の世界を例に見てみよう。この世界では伝統的に完全なフランス中心主義が見られ、登場人物はフランス人、舞台はフランス（とりわけパリ）、挿絵にはエッフェル塔や凱旋門、というのが典型的なフランス語教科書であった。ところがここ数年、状況に変化が見られるのである。フランス語教育の場で、フランス以外のフランス語圏が扱われることが増えているのだ。そうなるとう登場する機会が増えるのはフランコフォニーの第 2 の中心ケベックである。ここ数年新しくフランスで出版されたフランス語教科書には、ケベックが、さりげなく（たとえば気候の表現を学ぶ課で）、あるいはしっかりと（写真入り特集ページとして）登場しているのである。

フランス語が国民国家の基盤として確固とした地位と伝統を誇るフランスではなくて、むしろ、英語の大海のなかに取り残されながら懸命にフランス語とその文化を守り続けてきたケベックの姿を、フランス語教育の場で扱いたくなるのは、私がケベックにかぶれてしまったせいもあるだろうが、確かにそうさせる外的状況があるように思う。フランス語（あるいはフランス）の世界的な地位の低下という問題がそこにはある。しかしそれだけではない。

ケベックの姿は、グローバル化が進み文化の画一化が指摘される現在の世界的状況のなかで、私たちがどう生きるかを考えるための、1つの指針を示してくれるのではないだろうか。

他の分野においても、たとえば移民政策については、ケベックのインターカルチュラリズムや「妥当なる調整 *accommodements raisonnables*」が近年注目を集めていると聞く。今ケベックを知りたい人は増えているのではないか。そこで、時宜よろしく登場するのが『ケベックを知るための54章』である。

『ケベックを知るための54章』は、2009年3月31日、明石書店のエリア・スタディー・シリーズの72番目の1冊として刊行された。このシリーズのなかで、はじめて独立国家ではない1地域を扱う画期的な1冊であると言う。同シリーズにはすでに2003年刊の『カナダを知るための60章』があり、なかでももちろんケベックも扱われている。そのうえで新たに独自の巻が編まれたということは、ケベックが地域研究として一国なみの重要性を持つことの証である。『カナダを知るための60章』のなかで「ケベック問題」と「問題」扱いされていたケベックが、のびのびとその全貌をあらわしているのがなんとも嬉しい1冊なのである。

北米大陸の広大な英語圏の「海」に取り残されたフランス語の「孤島」、そうしばしば喩えられるケベックであるが、フランス系の言語文化を保つためにケベックの人々が辿ってきた歩みや創造性にあふれる豊かな文化と社会の営みは、尽きることのない魅力にあふれている。本書はそんなケベックの魅力を見事に伝えてくれている。

本書を手にとってみよう。まず表紙を飾る写真のケベックの人々の素朴な笑顔が私たちをこの本に迎えてくれる。ヌーヴェル・フランス祭りに17世紀の農民の衣装をまとして参加する人々の写真である。旧フランス植民地を祝うこの祭りは、毎年8月はじめにケベック市で催され、旧市街は入植当時の衣装を着た人々で溢れ、路上の至る所でさまざまなパフォーマンスが繰り広げられる。Je me souviens（私は忘れない）をモットーとするケベックの人々にとって仏系のルーツは彼らのアイデンティティの出发点であり、本書の表紙がこの祭りの写真で飾られていることに意義深いものを感じる。ちなみに裏表紙にはモンリオールの雪景色の写真が、これもまたケベックの象徴的な一面を表している。

そして本書を開くならば、仏系の伝統にとどまらないケベック社会のさまざまな面が見えてくるだろう。目次からはケベックの多面性を伝えようとする本書の意欲がうかがわれる。各章のタイトル、および副題が内容をよく伝え、ケベックという複雑な対象を捉えるために工夫した構成がとられていることがわかる。

全54章はI～IXの9部に編成されている。まず、前半のI～IVでは、ケベックを構成する枠組み、つまり地理や歴史、政治・経済、社会構造などが扱われる。中盤のV～VIでは、カナダにおけるケベック社会の独自性や文化的アイデンティティの模索が扱われ、ケベック社会の葛藤や変遷を理解することができる。後半のVII～IXに扱われるのはケベックの芸術・文学・ライフスタイルといったソフト面であり、それまでの章でケベック社会の枠組みを十分に理解したうえで、そこに花開いた多彩な文化活動を具体的に知ることができるという構成になっている。

各部の内容を以下に簡単に紹介しよう。

第I部の「自然環境と都市」はケベックの地理的紹介である。母なるセントローレンス河の位置づけがなされ、ケベック、モントリオールという2大都市が紹介される。住民の言語やエスニシティについても触れられているが、これらのテーマは重要なライトモチーフとなって、その後の複数の章のなかで変奏が繰り返され、ケベックを重層的に理解させてくれることとなるだろう。

第II部の歴史については4章が割かれ、ヨーロッパ人到着以前のケベックから、入植時代、英領時代を経て、カナダ連邦内での近代社会の形成にいたるまで、ケベックの辿ってきた道筋がわかりやすく解説されている。ケベックを理解するために欠かせない歴史的知識を与えてくれる数章である。

第III部「政治・経済・対外関係」では、ケベック政治のしくみ、政党政治につづき、ケベック・ナショナリズムが解説される。また、現代ケベックにおける産業構造や対外関係が詳細に示されている。対日経済関係などの具体的データが興味深い。

第IV部は「人口動態・民族・ひと」と題され、民族的な出自構成や人口動態、先住民の人々の歴史や現状、マイノリティの人々の宗教的な慣行に関する問題、そして社会保障制度について解説され、ケベック社会の多元性が明らかとなっている。

ここからが中盤である。第V部「カナダにおける独自の社会」と第VI部「文化的アイデンティティの模索」は、「ネーション」としてのケベックや、

ケベック・アイデンティティを扱う重要なパートである。北米大陸に取り残されたフランス系の人々の「生き残りの哲学」、ひたすら困難を耐え忍び、誠実に生き抜いた彼らが、1960年代の「静かな革命」を通じて急速な近代化をとげ、ケベコワとしての意識を得ていく経緯が扱われる。読み応えのある章が続く。とりわけ言語政策、教育政策について詳しい解説が得られる。

本書の後半では具体的な文化的営みが紹介されている。第 VII 部「舞台と映画」では、シャンソンから映画、演劇、ダンス、シルク・ドゥ・ソレイユにいたるまで、ケベックの創造性あふれる表現芸術が紹介される。第 VIII 部「ケベック文学」は、『マリア・シャブドレーヌ』の伝統的世界から移民作家たちのトランスカルチュラルな文学まで、ケベックの文学活動を一望させてくれる。第 IX 部「人々の暮らし」では、ケベックの冬、メープルシロップ、食文化や各地の行事一覧など、生活に密着した情報が収められ、ケベックを身近に感じることができる。

なお、本書は第 1 章から通読することによって、ケベックの姿を重層的に捉えることができるように巧みに構成されているが、各章は独立した記述がなされており、読者は関心のある章から読み始めることもできる。27 人の個性豊かな執筆者の文章が統一感ある 1 冊にまとめられている。丁寧に編まれており、用語などの面で混乱することはまったくない。本書はケベックを理解するための手引書、参考書として今後日本における欠かせないレファレンスとなるだろう。ケベック州に関する歴史年表や文献情報ガイドも便利である。ただ情報量の豊かな本書であるだけに、人名、地名などのインデックスがあればさらに有益であったことと思われる（が、このシリーズでは他でもインデックスがあるものはないようだ）。

折しも昨年 2008 年は、1608 年のサミュエル・ド・シャンプランによるケベック市創設から 400 周年の記念の年であった。数々の困難にかかわらず独自の文化を育み、豊かなケベック社会を確立してきたケベックの人々にとって、この 400 年は祝う価値のある年月であったはずだ。そして遠く離れた日本においても、本書の完成は昨年 10 月の日本ケベック学会発足とならび、ケベックの 400 年を祝うにふさわしい記念事業の 1 つとなったと言えるだろう。

（こまつ さちこ 筑波大学准教授）